

佐々木マキ

なぜなぜライオン



理論社



おはなしパレード 7

なぜなぜライオン

NDC913

菊変型判 21cm 63p

1997年2月初版

ISBN4-652-00869-4

佐々木マキ(ささき・まき)

1946年、神戸市に生まれる。京都市立美術大学中退。マンガ家・イラストレーター・絵本作家。絵本に『やっばりおかみ』『ムッシュ・ムニエルをござようかいします』『たわごと師たち』『ちいさなクリスマスのほん』(福音館書店)『ねむいねむいねずみ』シリーズ(PHP研究所)『スキヤット大佐の記録』(リプロボート)『なんぎなたんけんたい』(小学館)、訳書に『すんだことはすんだこと』『ヘンゼルとグレーテル』(福音館書店)などがある。

作者 佐々木マキ

発行 株式会社 理論社

発行者 下向 実

東京都新宿区若松町15-6

〒162-0056

電話 営業 (03)3203-5791

出版 (03)3203-2577

2000年5月第29刷発行

©1997 Maki Sasaki Printed in Japan.

落丁・乱丁本はお取り替えます。

なぞなぞライオン

江苏工业学院图书馆
藏书章



佐々木マキ

理論社

もくじ

なぜなぜライオン

3

へビは、はやくち

23

しりとりなサイ

41

なぞなぞライオン



秋^{あき}のある日^ひ、女^{おんな}の子^こが森^{もり}できのこをとっていると、
「こども、おまえをたべてやる！」

と、さけびながら、人^{ひと}食^くいライオンが草^{くさ}むらから
とび出^だしてきた。

女^{おんな}の子^こはあわててにげようとしたけれど、すつて
んころりと、ころんでしまった。ライオンが^{おお}大きな

口くちをあけて、女おんなの子こにとびかかろうとしたそのとき、
女おんなの子こがいった。

「ちよ、ちよつとまって。そのまえに、なぞなぞし
ない？」

ライオンはとびかかるかっこうのまま、ぴたりと
とまった。

「なぞなぞだつて？」

「そう。あたしの出だすなぞなぞに、こたえられたら、
あたしをたべてもいいわ。でも、こたえられなか
ったら、あたしはこのまま、おうちへかえる。ど
う？」



・ライオンはにやりと笑った。

「そりゃいいや。おれさま、なぞなぞは、とくいちゆうのとくいなんだ。なんでもいってみな」

女の子はゆっくり立ちあがると、こういった。

「それじゃ、いい？　　“上は大みず、下は大かじ”

な—に？」

それをきくと、ライオンは笑いだした。

「がはは。そんなの、かんたんすぎらあ。こたえは

“おふろ”にきまつてるだろ」

「さんねんでした」と女の子がいった。「こたえは

“海底火山”です」

ライオンは、ポカンとしている。

「なんなんだよ、その、かいていかざん、て」

女おんなの子こは、ころんだとき地面じめんにちらばったきのこを、かごにあつめながら、

「あなた、海底火山かいていかざん、知らないの。火山かざんは火ひをふく

山やま。それが、海うみの底そこにあるのよ。だから、おふろな

んかより、もつともつと、上うえは大おおみず下したは大おおかじな

わけ。わかった？」

「あ、そう。そういうことか。ふーん」

そういいながら、ライオンは（いい天気てんきだなあ）

というふうに、空そらを見あげていたけれど、心こころの中なかで

は「くそつ、くやしいなあ。こんな小さな女の子で
もしってることを、おれさまがしらなかったなん
て」とおもっていた。

「それじゃ、あたしはかえるから」

女の子が歩きだそうとすると、ライオンは、すば
やくとおせんぼした。

「まてまて。そうはいくもんか。こんどはおれがな
ぞなぞを出すんだ。こたえられなかったら、食っ
てしまう」

「わかったわ」女の子はためいきをついた。「でも、
早くして。あたしいそいでるの」



ライオンはニヤニヤして、両手^{りょうて}をこすりあわせる
と、

「では、目^めでみないで、口^{くち}でみるもの”これ、な
ーに?”」

「そんなの、かんたんよ」と女^{おんな}の子^こがいった。「こ
たえは”味^{あじ}”でしょ」

そのとたん、ライオンはよろこんでとびあがった。

「わーい、まちがえた。まちがえた」

女^{おんな}の子^こは口^{くち}をとがらせて、ライオンにつめよった。

「どーしてまちがいなの? どーして?’」

ライオンは、うれしくてたまらないというふうに、

体をくねらせながら、

「いいかい、おちびさん。おれはこういったんだぜ、
“耳みみできかずに、目めできくもの、なーに” ってね。

だから、こたえは“めぐすり”なんだよ。おきのど
くさま」

「うそー、そんなふうに、いわなかったわ」

「いったもん。ちゃんと、いったもん」

「いわなかった！」

「いった！」

「あきれた。なんてずるいライオンでしょう」

「フフン、なんとでもいうさ」

ライオンは長い^{なが}したでペロリと口^{くち}のまわりをなめると、女^{おんな}の子^こにとびかかろうとした。

「でも、いつときますけどね」と女^{おんな}の子^こがいった。

「あたしは、とてもきたないのよ。おふろに、ひと月^{つき}いじょうも、はいつてないの」

女^{おんな}の子^こは、さつきころんだときよごれたひざこずうを、ライオンに見^みせた。ライオンはとびかかるかっこうのまま、ぴたりととまった。

女^{おんな}の子^こはつづけた。

「あたしはね、とても、きたないの。そして、とても、くさいの」



ライオンは、ちよつときぶんがわるくなってきた。
「まいったなあ」そうつぶやくと、ライオンは女おんなの
子こにむかつて、へんにやさしい声こえで「このさきに川かわ
があるんだけどさ。どうだろ、そこで体からだをあらうつ
ていうのは？」

「とんでもない！」と女おんなの子こはいった。「そんなこ
としたら、かぜをひいちゃうわ。あなた、かぜをひ
いて元氣げんきのないこどもをたべて、おいしいとおも
う？」

「うう、おもわない」

ライオンは、こまってしまった。

「あたしのうちへいけば、おふろがあるんだけどな

……」

女の子は両手をうしろにくみ、かた足をぶらぶら

させながら、そういった。

「おふろか。そりやいい。きれいになったところを、
まるかじり。それ、いい」

とライオンがいった。

家につくと、さっそく女の子はおふろにはいった。

ライオンは、ふろばのドアのところから、女の子
のようすを見ていたが、そのうち体じゅうが、むず